スポーツ行動に関する実証的研究(2)^{注1)}

荒井 貞 光* 松 田 泰 定*

(昭和52年2月19日 受付)

A Positive Research on the Sport Behavior (2)

—Correlations between 16 Variables Constituting Sport Behaviors—

Sadamitsu Arai Yasusada Matsuda
(Hiroshima University)

Abstract

This is the second part of a series of study to investigate the psychological and sociological mechanism of sport behavior. The first study was done in 1974 and we used the results of that study as the basis for the questionnaire in this study. The questionnaires were given out to the same subjects reduced in number for the statistical sampling from 4,072 to 3,625.

The main purpose of this study was to find out phase of sport behavior using the variables in the hypothetical model, through analysis of the correlation between variables and the relationship of some specific variables using frequency of playing as a common factor.

The following results were gathered after the data were collected and analyzed :

1. It was found that all the variables listed in the hypothetical model shows a significant relationship. The relationship, especially between sport activity was unusually high.
2. The relation between subjective and objective conditions to sport activity is different according to sex and frequency of performance of sport activity. When the performance of sport activity is done insufficiently, the relation between objective condition and sex was of the same degree in both females and males. But when the performance of sport activity was done frequently, there was a remarkable difference between sexes. The females indicated a tendency of high relationship to objective conditions while the males showed a tendency of high relationship to subjective conditions.

On the basis of these results from the survey, research on this subject in more details in the future is needed.

(Sadamitsu Arai, Yasusada Matsuda : A Positive Research on the Sport Behavior (2), *Jap. J. Phys. Educ.*, Vol. 22, No. 3, Sept. 1977, pp. 137~152)

I 問 題

この研究目的は、スポーツ行動の心理的、社会的メカニズムを明らかにすることを通して、人々

のスポーツ活動を制御する有効な方法を作成することにある。すなわち、どのような場合に人はスポーツをし、どのような効用を得るかを解明し、「人々のスポーツ参加を支援し、人々がスポーツ

*広島大学

による利益を取得するにはどうすればよいか」についての原則とその方法を考えることである。これに應えるためには、単に、その傾向や実態を把握した先の研究(1)²⁾のような分析法では不可能なことはいうまでもない。最も精密な科学操作としては人為的に諸々の環境条件を統制した中で、個人の行動がどのように変容するかを追跡的に観察する方法、すなわち原因と結果がよく整理できる方法が考えられる。しかし、そのような環境制御は社会科学の領域では、まず不可能に近い。永吉ら¹⁶⁾は、この問題を調査対象者を活動実施者群と非実施者群とに分別し、それを多変量解析の手法により比較することで処理している。しかし、活動を「する群」と「しない群」とに二大別する方法は活動頻度の階層的な特長をあまり考慮しない結果になるのではないか。また、中島¹⁸⁾、山本¹⁹⁾、金崎²⁰⁾は、スポーツ活動を頻度別に3から4に階層化し、活動に寄与する諸要因の分析を試みている。しかし、3~4群に分類しても、統計処理(例えば χ^2 検定)の時点で一つに合わせてしまっただけでは、階層間の差や特徴は明らかにならないのではないか。例えば「全くしない」群と「毎日やる」群を含めて同時に統計処理をすると、「全くしない」群と「少しやる」群、「少しやる」群と「毎日やる」群間にみられる階層間の微妙な差がでてこないのではないかと思われる。これでは最初に細かく分類した意味がない。検討を要する第一の問題である。

次に考えなければならないことは、各階層間の差をみようとする際、何をその比較項目にするかである。スポーツ行動を分析しようとする場合、活動を生起させ、成立させている要因に何を措定するかがその問題となる。これは諸知見を参考に、しかもある程度ア priori に設定せざるを得ない。本研究では、先行研究、調査を吟味し、スポーツ活動を生起させ、成立させる要因として、16の変数を選択し、II-2で述べる仮説に従い、変数間の構造を整理し、変数の集合体としてのスポーツ行動モデルを作成した。なお、ここで用いるモデルは、「経験的に検証さるべき仮説」¹¹⁾としての意味を持つ「変数間の関係についての命題、またはその集合」¹²⁾とする考え方によっている。

以上のように、実態の把握にとどまらず、変数間の相互連関、諸々の変数と行動結果との関連の解明を研究目的とした場合、調査対象者の分類による比較と、比較する共通の枠組が不可欠のものとなってくる。本研究の方法論上の問題もこの2点に絞られると言ってよい。

II 概念、仮説

1. 概念

a. スポーツ活動、スポーツ行動

スポーツ活動を具体的なスポーツ場面で展開され、しかも第三者に容易に知覚できるような諸々の行為として規定する。これに対してスポーツ行動は、知覚できないもの、例えば顕在化していない段階のものまで含み、また時間的広がりにおいても、可視的なスポーツ活動に至るまでの経過とそれから後の予測的な領域の問題をも含む、より一層広範なものと考える。具体的には活動主体を考えてみても、内面化されている社会規範、スポーツに対する態度など、現時点に至るまでの過程で変容、形成されてきたものが多い。スポーツ行動は、これらと客体側の条件、つまり自然環境、社会環境等との相互作用の中で具体的なスポーツ活動が生起し、発展し、そして消滅する社会的行動であると考えてよい。すなわち、スポーツ行動の研究は、顕在的、あるいは潜在的に、スポーツ活動を構成する活動主体と客体との相互連関のメカニズムの解明にある。したがって、スポーツ行動の分析枠組は、主体条件、客体条件がアンビバレントに配置され、しかもダイアディックに関連する説明図式が仮定されよう。

b. 1次変数、2次変数

行動を構成する変数を考えた場合、これらの変数群の中には、従属変数としての活動に直接影響を及ぼすものと、間接的に影響を及ぼすものという具合に、2種類があると考えた方がよい。「人間が行動する時、すべての環境、すなわち彼を取りまく自然環境、社会環境、文化環境のすべてが、行動の動機における知覚、思考、感情、情緒の内容や対象となるのではない。」⁶⁾という指摘は、知覚、認識レベルだけでなく、活動レベルを考えた場合にも十分当てはまる命題のように思わ

れるからである。ここでは、スポーツ活動に直接影響を与えることが予想される変数を1次変数、およびこの変数との関連において間接的に影響を与えることが予想される変数を2次変数として分類、整理する。

c. 主體的變數，客體的變數

具体的な変数のリスト・アップについては、従来の研究はそれほど慎重ではなかったようである。ここでは変数の選択規準を二つ用意した。

第一の規準は、Takenoshita⁷⁾の先駆的研究をはじめとして大部分の研究にみられるように、基礎的な変数として性や年齢、職業を採用することに関わる問題である。確かに、性や年齢、職業をそれぞれ一つの変数として扱えば、それと活動との相関関係は見いだされる場合が多い。しかし、この三つの変数自体は制御できない、あくまで不可変のものである。ところで、本研究の究極の目的は、スポーツ行動の制御にあるわけで、明らかに制御不可能な変数は数は初めから外さないと意味がなくなる。こうして本研究では「人為的にAを設定する行為」¹⁸⁾が可能かどうか、すなわち可変的変数か否かで諸々の変数の選択をまず行なってみた。

次に、可變的なものとして考えられるが、個人の次元で変更できるような變数と、集團で共有され、個人にとっては多少とも与件視されるような變数との間には何らかの差異を認めるべきではないか。例えば、健康という個人内部での状態と、スポーツ施設の利用という状態（利用するかしないかは、個人の問題であるが、施設があるかないかは個人の問題外である）とは異質であり、前者は個人内での調整、処理が可能であるのに対し、後者は集團としての対応が必要とされてくるからである。このような意味から、個人の内部で変更が可能な變数を主体的變数と呼び、個人内では処理できず、集團としてまた社会としての対応が要求される變数を客體的變数と呼んで二つめの選択規準とした。

d. スポーツ行動分析の準拠モデル

以上述べてきた変数の二つの分類，すなわち1次変数，2次変数，主体的変数，客体的変数を規準にして，先行研究，調査を検討し，この二つの

分類規準をクロスし、1次変数で主体的条件のカテゴリーに入る変数として、態度Ⅰ、態度Ⅱ、経験、技能と健康を、1次変数で客体的条件のカテゴリーに入る変数として、施設、指導者、集団、余暇時間と所得を、また2次変数で主体的条件に入る変数として欲求、生活価値と満足感を、2次変数で客体的条件のカテゴリーに入る変数として地域、スポーツ価値と社会的価値をカテゴライズした。^{注2)}そして、従属変数としての活動結果を中心に主体的、客体的変数の各カテゴリーを横軸に対称的に、また1次変数を活動に直接関わる位置に、また2次変数を1次変数を媒介にして活動と関わる位置に配置し、おおよその構造化を試み、上述の16の変数をそれぞれの位置に配置した体系が、図1のスポーツ行動モデルである。すな

図 1 スポーツ行動分析の準拠モデル

われら、活動を中心に左空間に主体的変数を、右空間には客体的変数を配置し、1次変数と2次変数の区別は活動と直接ラインをひくか、ひかないかでその差を表わした。直接ラインがひけるものが1次変数である。なお上下の空間的配置については、下部分には所得や余暇時間と健康等比較的基底的、物理的な変数を、上部分には価値観、満足と意識等、比較的個人の主観に関わるものをあげている。

e. 2 群分類, 3 群分類

統制的な実験ができにくい本研究の性格上、調査対象者を分類、比較することで初期の目的を達成せざるを得ないことは先にも述べた。それだけ

に、対象者の分類には慎重さが要求される。先行研究が「する」「しない」の2分類か、細かく分類しても最終的にはそれらを合わせた統計処理と考察を行なう長所と短所については先にも述べた。本研究では、この問題を高木⁸⁾にみられる考え方を参考に処理した。それは社会的行動に及ぼす態度効果をみるのに被調査者を2群分類（経験有り群、経験無し群）、3群分類（多頻度経験者群、少頻度経験者群、無頻度経験者群）の尺度から分類し、別個に比較考察しているからである。これに基づいて、本研究では、2群分類を非実施者群（この1年間に運動やスポーツをしなかったもの）、非継続的实施者群（月1~2回、年4~5回したもの）の分類とし、また、3群分類を非継続的实施者群（同上）、継続B型実施者群（週に1回した者、週に3日した者）、継続A型実施者群（ほとんど毎日）の分類とした。

次にこの二つの分類と変数との関わりについて述べる。今回は、先に示したスポーツ行動モデルの中で1次変数として採用した主体的、客体的変数10個について主に考察する。1次変数のカテゴリーに入る主体的、客体的変数群は、2群分類ではどれが強く、どれが弱く関連しているか、同じように3群分類ではどうなるかをみて、最終的に二つの分類間に見いだされる差を明らかにしたい。比較対照群が、同一個人、同一集団を縦断的に追跡したものではないという方法論的限界はあるが、2群分類の分析の中で、スポーツ活動はどのようなメカニズムにより生起するか、また3群分類の分析を通して、生起した活動がどのようなメカニズムでより活発化するかを推測してみたい。

さて、スポーツ行動を明らかにするのに、活動を中心にとらえていくという場合、その活動とは何を指すのかという問題が残される。ここでは活動を頻度に限定するが、こうした量的なとらえ方のほかに、種目や技術レベルの差による比較も行なっている。しかし、ここでは第一段階として頻度に限って報告する。

2. 仮説

以上、分析に入る前に必要な概念、そしてそれらの集合体としての仮説的モデルについて説明した。それらを作業仮説の形でまとめると次の二つ

に絞られる。

①スポーツ行動を構成すると仮定したモデルの個々の変数相互には有意な関連が認められるか。特に1次変数、2次変数あるいは主体的変数、客体的変数として区分した構造化には何らかの意義が認められるだろうか。また関連が認められた場合、二つの変数は具体的にどういう関わり合いをするかについても検討する（ここでは中島¹⁴⁾により、反応内容という言葉を用いる）。例えばスポーツをよくする人ほど健康度が高いか、またはよくする人ほど生活の満足度は高いか等である。これらは日常経験的には認められるものが多いが、統計的な処理を基に体系だって述べられることは少なかったようである。

②スポーツ活動が実施される際には、様々な条件が複雑に関与していよう。活動が生起する段階、活動が持続し、更に発展する段階、そのそれぞれで変数の関与の仕方に差があるのではないか。ここでは1次変数を取り上げ、主体的、客体的諸変数が2群分類、3群分類の比較対照群ごとにどのように関連しているかを明らかにすることで、この仮説に間接的ではあるが、応えてみようとするものである。

性、年齢、職業については、先述した理由により、変数として取り扱うことから外してある。この意味からすると、性、年齢、職業別に、またこの三つの条件を三重クロスした一つ一つのパターンについて、仮説が検証されていく必要がある。しかし、これを行なうには、多量の作業を要するので、今回は性別に限って分析した。

III 方 法

1. 方 法

図1のスポーツ行動モデルを枠組に、42の質問項目を考え、一度のプリ・テストを実施し、その修正を経て「広島県民の体育・スポーツに関する調査」票を作成した。この段階で、調査実施の量的制約等から社会的価値、スポーツ価値に関わる質問項目を挿入することができず、今回は割愛した。調査票の配布と回収は、県教育委員会―市町村教育委員会―体育指導委員―被調査者のルートによって行なわれた。

2. サンプルングと調査対象者の特性

調査は、広島県民の20歳以上の男女(学生は除く)を母集団とした。標本数は、県下全市町村を調査対象地点(98地点)に5,000人とし、抽出方法は二段階抽出法によった。まず標本数5,000人を当該市町村ごとに、県人口の対比人口で算出する比例割当法をとり、次に各市町村ごとの抽出については選挙人名簿、また戸籍台帳を原簿にした等間隔抽出法を採用した。

調査票の回収数は4,072(81.4%)であり、このうち今回の分析に有効であった標本数は3,625(72.3%)である。性、年齢、職業別に調査対象者の特性を記述する。男子(60.5%),女子(39.5%),20歳台(24.8%),30歳台(31.1%),40歳台(25.2%),50歳台(12.7%),60歳台(4.8%),70歳台(1.5%)である。職業別内訳をみると、農・林・漁業従事者(6.6%),土木・建築・製造加工業従事者(23.3%),卸小売・飲食・運輸通信・マスコミ・金融保険業従事者(17.0%),社会奉仕・医療・公務員・教員等(20.7%),主婦(20.2%),その他(12.1%)である。対象者に比較的若い男子層が多く、また第三次産業のカテゴリーに入る者が多いことがわかる。これは広島県の平均的傾向を明らかにするのに比例割当法によったため、都市的性格の濃い広島地区の標本数が63.3%と多く抽出、回収されたためである。

3. 調査と集計時期

調査は1974年11月から12月にかけて実施された。第一次の基礎集計は1975年3月から6月にかけて集計、分析された。今回の第二次のクロス集計は1976年5月から7月にかけて行なわれた。なお集計は広島大学計算センターの計算機TOSBA-C-5600を使用した。

4. データの整理と解析法

仮説①を検証するため、モデルを構成している各々の変数間について有意な関連が認められるかどうかを χ^2 検定によって検討した。検定の結果に有意な差が認められるほど、二つの変数は相互に関わり合いを持つとみてよい。この考え方は、中島¹³⁾による所が多い。また反応内容の分析は、 χ^2 検定の結果をふまえて、百分率による比較を通して行なう。

仮説②については、変数の関連する強さの順位を明らかにすることによってみていく。ここでは活動と直接的関係にある1次変数のみを取り上げている。2群分類、3群分類のそれぞれで、活動に関連する変数の強さの順位づけを行なう。この種の先行研究としては、青井・松原・副田¹⁴⁾らの研究があり、それを体育、スポーツの研究領域に応用したものに山本²⁰⁾、西垣¹⁷⁾の研究がある。両者とも、変数の関連する強さの度合を調べるのに、 χ^2 検定による変数間の有意差の把握とクラマーの関連係数を算出することで、関連度が高い変数から低い変数への順位づけを行なっている。クラマーの関連係数の計算式は、 $Cr = \frac{\chi^2}{n(t-1)}$ (χ^2 : カイ二乗値, n : サンプル総数, t : 関連する2項目のうち選択肢の少ない項目の選択肢数)であり、Cr値が+1のときは、変数の関係は完全連関、Cr値が0のときは無関連ということになる。しかし、ここでは先行研究によって、Cr値の平方根をとって係数の値とし、 χ^2 検定の結果と比べながら、関連度の順位を決めた。

IV 調査結果

1. 変数間の関連とその主な傾向

ここでは、図1のスポーツ行動に関する仮説的モデルに従い、モデルを構成する24例の変数相互の関連について述べる。表1-1から表1-24は、 χ^2 検定の結果と具体的な反応内容を百分率によって男女別に表示したものである(変数とその意味する内容、またその質問文を表1-0として示す)。

a. 変数間の関連

男子においてはすべての変数間に有意な関連性がみられ、また女子においても態度Ⅱと生活価値の関連(表1-9)を除くすべての変数間に有意な関連が認められた。この結果を変数の種別からみると、活動に直接関係するものとした1次変数群には、男女とも0.1%の危険度で有意な関連が認められたが、1次変数と2次変数間には1%, 5%水準のことが多い。これを主体的変数についてやや詳しくみると、男女とも態度Ⅰと満足度の間に5%の危険度で有意な関係が認められ(表1-5)、態度Ⅱと生活価値の関連(表1-9)、女子の態度Ⅱと健康の関連(表1-8)も同様である。しかし、男

表 1-0 変数の内容

変 数	内 容	質 問 例
態 度 I	スポーツ活動に対する好意的, 非好意的態度	あなたは運動やスポーツが好きですか。
態 度 II	スポーツ活動に対する効用的, 非効用的態度	あなたは運動やスポーツを行なうとき, どのような気持ちで行ないますか。
経 験	運動クラブの加入経験	あなたは学校時代に1年以上運動クラブ(運動部)に入ったことがありますか。
技 能	運動技能の自己評価	あなたの運動神経(腕前)はどの程度ですか。
健 康	健康状態の自己評価	あなたはこの1年間をふり返ってみて体の調子はどうでしたか。
施 設	利用施設の状況	あなたは運動やスポーツ活動をするとき, 主にどこで行ないますか。
指 導 者	指導者の有無	あなたが運動やスポーツ活動を行なっていくうえで技術指導や世話をしてくれる人がいますか。
集 団	スポーツのグループの加入経験	あなたはこれまでに学校以外の運動やスポーツグループ(クラブ)に入ったことがありますか。
余 暇 時 間	平日の自由時間	あなたの平日の自由時間(交際・休養・レジャー活動等)はどのくらいありますか。
所 得	年収	あなたの所帯の昭和48年度の年収はどのくらいでしたか。
欲 求	運動欲求	あなたは運動やスポーツをしたいと思いますか。
生 活 価 値	仕事と遊び観	仕事や遊びについていろいろな考え方がありますが, あなたの考えは次のどれに最も近いですか。
満 足 感	生活の満足度	あなたは最近の日常生活に満足していますか。
地 域	住居の環境	あなたの現在の住居の環境は, 下の左の欄のA~Hのうちどれにあたりますか。また, 最近の住み具合は右にあげた1~4のうちどれにあたりますか。二つの答の交わる所に○をつけて下さい。

表 1-1 (欲求) × (態度 I)

男子 p = 0.001

女子 p < 0.001

(%)

	非常に好き		好 好		き 嫌		い 嫌		非常に嫌い		D. K.		計 (実数)	
非常にしたい	34.9	34.3	14.0	15.0	0.6	0	0	0	0.3	0	0.3	0.7	357	140
し た い	24.5	16.2	66.6	70.0	7.6	12.3	0	0.4	0	0	1.3	1.1	1271	734
どちらともいえない	3.0	0.6	32.8	31.4	58.8	11.9	1.9	3.6	0	0.6	3.5	3.1	427	357
したくない	1.2	1.2	29.3	22.3	46.7	45.2	17.4	18.7	1.1	5.0	3.3	3.6	92	139

注 マスの中で左が男子, 右が女子の%を表わす。以下, 同様。

D. K. は Don't Know の略であり, 「わからない」を表わす。以下, 同様。

表 1-2 (欲求) × (態度 II)

男子 p = 0.001

女子 p < 0.001

(%)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	計 (実数)										
非常にしたい	44.4	41.2	19.3	22.1	3.7	15.9	15.3	19.1	8.4	4.4	2.0	6.6	2.9	0.7	0.9	0	3.2	0	347	139
し た い	44.0	37.9	22.9	16.4	1.3	0.7	11.5	15.5	12.5	22.4	3.8	6.7	7.9	0.4	0.9	6.4	2.2	3.9	1251	722
どちらともいえない	28.7	28.4	15.5	13.9	1.2	0	12.0	12.9	24.7	39.8	4.0	5.0	0.2	0	8.5	0	5.2	0	425	355
したくない	20.7	42.0	16.3	14.5	0	1.4	4.3	8.7	13.0	30.5	3.3	2.9	0	0.2	7.2	0	15.2	0	92	138

①健康・体力の維持増進 ③運動技術 ⑤気分転換 ⑦試合に出る ⑨D. K.
 ②仲間作り人間関係 ④種目を楽しむ ⑥ストレス解消 ⑧その他

表 1-3 (態度Ⅰ) × (技能)

男子 $p < 0.001$ 女子 $p < 0.001$

(%)

	優れている		人並である		劣っている		D. K.		計 (実数)	
非常に好き	28.9	14.9	69.3	79.3	2.1	5.0	0	0.8	632	242
好き	6.4	3.5	83.6	76.9	9.2	18.2	0.7	1.5	1074	687
どちらともいえない	1.0	0.7	68.0	52.3	30.5	44.7	0.5	2.2	410	407
きらい	0	0	33.0	21.7	66.7	76.1	0	2.2	27	46
非常にきらい	0	0	0	11.1	50.0	88.9	50.0	0	2	9

表 1-4 (態度Ⅰ) × (健康)

男子 $p < 0.001$ 女子 $p < 0.001$

(%)

	調子よい		普通		調子よくない		D. K.		計 (実数)	
非常に好き	35.0	38.8	49.5	47.5	14.6	12.4	0.9	1.2	632	242
好き	21.3	22.0	58.8	52.3	18.8	23.7	1.1	2.0	1094	687
どちらともいえない	18.0	13.5	57.3	49.6	22.7	35.6	2.0	1.2	410	407
嫌い	7.4	2.2	37.0	45.7	55.6	47.8	0	4.3	27	46
非常に嫌い	50.0	22.2	0	33.3	50.0	44.4	0	0	2	9

表 1-5 (態度Ⅰ) × (満足感)

男子 $p < 0.05$ 女子 $p < 0.05$

(%)

	満 足		不 満 足		どちらともいえない		D. K.		計 (実数)	
非常に好き	39.9	51.7	37.0	24.4	23.4	21.5	0.6	2.5	632	242
好き	33.4	46.2	87.1	29.3	28.5	29.0	1.0	1.6	1074	687
どちらともいえない	29.3	35.9	33.9	31.7	34.9	31.0	2	1.5	410	407
嫌い	25.9	23.9	40.7	37.0	33.3	39.1	0	0	27	46
非常に嫌い	50.0	33.3	50.0	44.2	0	22.2	0	0	2	9

表 1-6 (態度Ⅰ) × (生活価値)

男子 $p < 0.001$ 女子 $p < 0.001$

(%)

	①		②		③		④		⑤		⑥		⑦		計 (実数)	
非常に好き	53.5	55.4	29.7	32.6	13.0	6.6	1.7	1.7	1.4	0.4	0.3	1.7	0.3	1.7	632	242
好き	48.1	50.7	29.1	36.0	17.4	7.3	2.1	1.2	1.4	0.4	0.8	2.3	1.0	2.2	1074	687
どちらともいえない	42.7	42.3	28.0	27.3	21.7	19.2	2.4	1.0	1.5	1.5	2.9	6.1	0.7	2.7	410	407
嫌い	29.6	30.4	25.9	15.2	29.6	28.3	7.4	2.2	0	4.3	7.4	17.4	0	2.2	27	46
非常に嫌い	0	66.7	100.0	0	0	0	0	0	0	0	0	33.3	0	0	2	9

①仕事も遊びも必要 ②仕事も大切だが遊びも必要 ③仕事第一、遊びは二の次
 ④遊ぶために働く ⑤その他 ⑥わからない ⑦D. K.

表 1-7 (態度Ⅱ) × (技能)

男子 $p < 0.001$ 女子 $p < 0.001$

(%)

	優れている		人並である		劣っている		D. K.		計 (実数)	
生理的効用	12.5	3.9	76.2	72.7	11.1	22.8	0.1	0.7	853	439
心理的効用	6.7	2.4	76.3	68.9	16.2	27.8	0.7	1.0	434	197
社会的効用	11.8	6.6	78.6	73.1	9.4	18.3	0.2	2.0	310	196
非効用	17.4	10.5	74.2	76.4	7.7	12.6	0.6	0.5	388	382

表 1-8 (態度Ⅱ) × (健康)

男子 $p < 0.01$ 女子 $p < 0.05$

(%)

	調子がいよい		普 通		あまり調子よ くない		D. K.		計(実数)	
生 理 的 効 用	26.8	22.6	53.2	51.0	19.3	24.1	0.6	2.3	853	439
心 理 的 効 用	27.9	32.0	53.2	48.2	17.7	19.3	1.2	0.5	434	197
社 会 的 効 用	22.9	22.4	60.0	54.6	16.5	22.4	0.6	0.5	310	196
非 効 用	17.3	19.6	62.4	51.6	18.8	27.5	1.5	1.3	388	382

表 1-9 (態度Ⅱ) × (生活価値)

男子 $p < 0.05$

女子 有意差なし

(%)

	①		②		③		④		⑤		⑥		⑦		計(実数)	
生 理 的 効 用	49.9	52.2	27.3	29.2	18.4	12.8	1.6	0.9	1.3	0.7	0.7	2.1	0.7	2.3	853	439
心 理 的 効 用	49.5	54.8	30.4	32.5	15.0	6.1	2.3	2.5	1.6	1.0	0.9	2.0	0.2	1.0	434	197
社 会 的 効 用	49.3	45.9	31.6	41.3	13.2	7.1	2.3	1.0	1.6	1.5	1.6	2.0	0.3	1.0	310	196
非 効 用	48.2	48.4	20.9	35.9	17.5	9.9	2.8	1.6	1.3	0.3	0.8	2.1	0.5	1.8	388	382

①仕事も遊びも必要 ②仕事も必要だが遊びも必要 ③仕事は第一、遊びは二の次

④遊ぶために働く ⑤その他 ⑥わからない ⑦D. K.

表 1-10 (態度Ⅱ) × (満足感)

男子 $p < 0.001$ 女子 $p < 0.01$

(%)

	満 足		不 満 足		どちらともい えない		D. K.		計(実数)	
生 理 的 効 用	41.0	46.2	33.8	25.5	24.4	26.2	0.8	2.3	853	439
心 理 的 効 用	27.8	32.5	39.2	35.9	30.7	30.0	2.0	2.0	434	197
社 会 的 効 用	32.9	45.2	38.5	25.9	27.9	26.9	0.7	2.0	310	196
非 効 用	30.0	38.8	38.1	32.7	31.6	27.6	1.0	1.2	388	382

表 1-11 (態度Ⅱ) × (態度Ⅰ)

男子 $p < 0.001$ 女子 $p < 0.001$

(%)

	非常に好き		好 き		好きでもき らいでもない		嫌 い		非常に嫌い		D. K.		計(実数)	
生 理 的 効 用	30.8	21.2	53.2	56.1	14.1	25.5	0.4	1.4	0.1	0.5	1.4	1.4	853	439
心 理 的 効 用	29.7	22.8	54.6	57.9	14.5	16.2	0.5	0.5	0	0.5	0.7	2.0	434	197
社 会 的 効 用	41.3	24.0	41.9	52.6	14.8	19.4	0.6	2.0	0	0	1.3	2.0	310	196
非 効 用	19.1	11.3	47.4	50.8	27.3	33.5	2.3	2.6	0	0	3.8	1.8	388	382

表 1-12 (地域) × (施設)

男子 $p < 0.001$ 女子 $p < 0.05$

(%)

	家の周辺		公園・空地		学 校		公共施設		商 業 ス ポ ー ツ		職場の施設		スキー場等		D. K.		計(実数)	
自 然	24.8	31.9	6.8	3.5	13.0	11.3	7.1	8.6	6.1	2.9	17.8	6.5	1.3	0.5	23.0	35.0	983	665
静 か	21.5	30.8	10.8	7.0	13.8	13.7	5.8	15.4	8.9	3.3	17.0	5.4	1.9	0.3	20.4	26.1	530	299
うるさい	22.5	29.5	9.5	4.4	14.5	15.6	6.0	7.6	9.3	2.2	13.2	2.5	1.0	0.3	24.0	37.8	484	315
郊 外	27.1	27.7	17.1	8.5	5.7	6.4	10.0	14.9	7.1	4.3	14.3	4.3	0	0	18.6	34.0	70	47

表 1-13 (地域) × (指導者) 男子 $p < 0.05$
女子 $p < 0.01$ (%)

	い る		いない		D. K.		計 (実数)	
自 然	32.1	28.9	59.5	57.1	8.3	14.0	983	665
静 か	39.2	40.1	54.3	47.5	6.4	12.4	530	299
うるさい	39.3	39.0	53.3	48.9	7.4	12.1	484	315
郊 外	32.9	25.5	62.9	68.1	4.3	6.4	70	47

表 1-15 (活動) × (運動部) 男子 $p < 0.001$
女子 $p < 0.001$ (%)

	あ る		な い		D. K.		計 (実数)	
非 実 施	36.4	29.7	59.6	66.4	4.0	3.9	426	592
非 継 続	60.0	49.4	38.7	48.8	1.2	1.8	764	389
継 続 B	76.1	68.7	23.2	29.6	0.8	1.8	781	335
継 続 A	69.2	62.5	28.8	37.5	1.9	0	156	48

表 1-14 (地域) × (集団)

男子 $p < 0.05$
女子 $p < 0.01$ (%)

	①		②		③		④		計 (実数)	
自 然	25.1	13.7	20.1	10.5	48.8	67.2	5.9	8.6	983	665
静 か	31.1	15.7	21.9	21.1	41.5	57.2	5.5	6.0	530	299
うるさい	25.8	14.3	27.5	13.3	41.1	64.1	5.6	8.3	484	315
郊 外	30.0	14.9	22.9	19.1	45.7	63.8	1.4	2.1	70	47

①入ったことがある ②現在入っている ③入ったことがない ④D. K.

表 1-16 (活動) × (技能)

男子 $p < 0.001$
女子 $p < 0.001$ (%)

	優れている		人並である		劣っている		D. K.		計 (実数)	
非 実 施	3.1	1.7	68.5	56.3	27.2	40.0	1.2	2.0	426	592
非 継 続	7.5	4.9	79.2	74.6	13.1	20.3	0.3	0.3	764	389
継 続 B	18.4	8.1	76.8	81.5	4.7	9.3	0.4	1.2	781	335
継 続 A	24.4	12.5	69.2	70.8	6.4	14.6	0	2.1	156	48

表 1-17 (活動) × (態度Ⅰ)

男子 $p < 0.001$
女子 $p < 0.001$ (%)

	非常に好き		好 き		どちらでも ない		嫌 い		非常に嫌い		D. K.		計 (実数)	
非 実 施	10.1	6.6	43.0	41.2	38.7	43.1	4.2	6.1	0.5	1.4	3.5	1.7	426	592
非 継 続	21.2	15.4	54.3	53.7	22.1	27.0	1.1	1.8	0	0	1.3	2.1	764	389
継 続 B	43.0	37.7	49.2	53.4	0	7.5	6.4	0.3	0.1	0	1.3	1.5	781	335
継 続 A	51.3	29.2	39.2	54.2	0	14.6	9.0	0	0.1	0	0	2.1	156	48

表 1-18 (活動) × (態度Ⅱ)

男子 $p < 0.001$
女子 $p < 0.001$ (%)

	健康体力		仲間作り		技術向上		楽しむ		気分転換		ストレス 解消		試合出場		その他		D. K.		計 (実数)	
非 実 施	35.8	25.4	13.4	9.5	1.4	0.8	9.2	9.8	16.9	26.6	2.6	0	0	0	13.9	12.4	6.8	11.0	425	590
非 継 続	34.6	25.1	23.7	18.3	0.4	0.5	14.3	18.8	18.2	25.1	0.4	7.0	0.5	0.5	2.4	2.9	1.8	1.6	760	383
継 続 B	47.9	46.5	22.3	18.3	2.2	2.1	11.3	12.5	10.9	13.1	4.2	4.9	1.5	0.3	1.6	0	0.9	2.1	761	327
継 続 A	53.9	52.1	14.5	12.5	5.3	0	11.8	12.5	6.6	10.4	1.3	6.3	4.6	2.1	0.7	2.1	1.3	2.1	149	48

表 1-19 (活動) × (健康)

男子 $p < 0.001$ 女子 $p < 0.001$

(%)

			調子がいよい		普 通		調子がよくない		D. K.		計 (実数)	
非 実 施	非 継 続	継 続 B	14.3	11.0	49.3	46.8	34.0	40.2	2.3	2.0	426	592
非 実 施	非 継 続	継 続 B	20.8	24.7	59.9	55.8	18.5	19.3	0.8	0.3	764	389
非 実 施	非 継 続	継 続 B	29.1	37.0	56.6	50.4	13.6	10.7	0.8	1.8	781	335
非 実 施	非 継 続	継 続 A	45.5	27.1	45.5	54.2	9.0	18.8	0	0	156	48

表 1-20 (活動) × (余暇時間)

男子 $p < 0.001$ 女子 $p < 0.001$

(%)

	1h 未満		1~2h 未満		2~3h 未満		3~4h 未満		4~5h 未満		5~6h 未満		6h 以上		D. K.		計 (実数)	
非 実 施	19.9	21.5	24.2	20.4	21.4	19.9	9.6	10.3	4.2	4.9	2.6	2.0	5.4	5.2	15.7	15.7	426	592
非 継 続	16.9	14.9	25.5	23.9	25.8	21.6	12.2	16.7	5.1	7.2	2.9	2.6	2.6	1.3	9.0	11.3	764	389
継 続 B	12.7	8.1	26.3	17.0	27.5	26.0	15.2	17.9	7.2	11.6	2.9	5.4	1.7	4.5	6.5	9.6	781	335
継 続 A	10.9	12.5	23.1	25.0	27.6	22.9	16.0	12.5	7.7	8.3	5.8	4.2	3.2	4.2	5.8	10.4	156	48

注. h は時間を表わす.

表 1-21 (活動) × (所得)

男子 $p < 0.001$ 女子 $p < 0.001$

(%)

			100万円未満		100～150万円未満		150～200万円未満		200～300万円未満		300～500万円未満		500万円以上		D. K.		計（実数）	
非 非 継 継	実 継 統 統	施統	14.2	18.1	23.4	20.3	22.3	21.8	21.8	17.1	8.2	9.6	1.2	0.8	3.3	12.3	426	592
		B	5.8	13.4	20.8	16.5	26.6	20.1	29.6	26.5	12.0	11.3	2.9	2.8	2.4	9.5	764	389
		B	8.5	11.0	23.7	12.8	24.7	22.1	26.9	23.3	10.4	12.8	2.6	1.9	3.3	16.1	781	335
		A	8.3	22.9	17.9	18.8	25.6	10.4	24.4	16.7	12.2	16.7	3.2	4.2	8.3	10.4	156	48

表 1-22 (活動) × (集団)

男子 $p < 0.001$ 女子 $p < 0.001$

(%)

			入ったことがある		現在入っている		入ったことがない		D. K.		計 (実数)	
非	実	施	15.3	7.8	1.4	0.7	73.0	81.6	10.3	10.0	426	592
非	継	続	28.4	20.1	16.4	5.7	52.6	70.1	2.6	4.1	764	389
継	続	B	31.6	20.0	39.4	48.1	25.7	28.1	3.2	3.9	781	335
継	続	A	35.9	18.3	28.2	10.4	33.3	68.8	2.6	2.1	156	48

表 1-23 (活動) × (指導者)

男子 $p < 0.001$ 女子 $p < 0.001$

(%)

		い　　る		い　　ない		D. K.		計 (実数)	
非 実 施		15.3	13.0	68.1	66.0	16.7	20.9	426	592
非 継 続		32.3	34.2	62.8	60.4	5.0	5.4	764	389
継 続 B		50.2	72.5	47.1	24.8	2.7	2.7	781	335
継 続 A		46.8	43.8	50.6	50.0	2.6	6.3	156	48

表 1-24 (活動) × (施設)

男子 $p < 0.001$ 女子 $p < 0.001$

(%)

	家の周辺		公園・空地		学 校		公共施設		商 業 ス ポー ツ		職場の施設		スキー場等		D. K.		計 (実数)	
非 実 施	21.6	29.4	6.8	4.1	4.9	2.9	1.4	2.0	3.5	1.5	5.9	1.0	1.4	0.5	54.5	58.6	426	592
非 継 続	29.8	41.9	9.0	6.7	10.2	13.9	6.0	6.2	9.6	4.9	13.7	8.5	1.6	0.3	20.2	17.7	764	389
継 続 B	18.8	20.3	9.9	6.0	21.4	27.2	9.5	28.1	9.5	3.4	22.4	6.3	1.4	0	8.5	8.7	781	335
継 続 A	17.9	39.6	10.3	6.3	16.0	20.8	9.0	6.3	3.8	4.2	35.3	0	1.3	16.7	6.4	6.3	156	48

女とも欲求と態度Ⅰ(表1-1), 欲求と態度Ⅱ(表1-2)の間には, 両者とも0.1%の危険度で有意な関連が認められている。欲求と態度と具体的行動との関係については, 戸川¹⁰⁾を参考にその構造化を試みたが, 欲求を生活価値等と同じく2次変数として位置づけることの当否については疑問であると言えよう。また客体的変数をみると, 男子が地域と施設の間で0.1%の危険度で有意な関連が認められるが(表1-12), 集団, 指導者とはそれほど強い関連は認められない。これは地域差が解消されるまでに客体的条件が各市町村において整備され平均化されてきたのを意味するのか, それとも地域の変数としての規定の仕方(注2参照)に問題があったのかここでは結論できない。いずれにしても地域の特性, 客体的条件等は最も社会的範疇に属するものでありより詳しい分析が必要である。

b. 1次変数と2次変数, および1次変数間にみられる反応内容

次に, これらの変数が具体的にどのように関連するか, その反応内容について述べる。態度と欲求について, その反応内容をみると(表1-1), 欲求の強い者ほどスポーツを好んでいる(特に述べない場合は, 0.1%の危険度で有意な関連にある。以下同様である)。態度Ⅱと欲求の関連をみると(表1-2), 男子では欲求の強い者ほど健康や体力づくりなどの生理的効用性^{注3)}, 仲間づくりなどの社会的効用性^{注4)}を認知する傾向がみられる。これに比べて女子は, 生理的効用性についてはその差は認められない。社会的効用性, 非効用性^{注5)}についてはやや認められるが, むしろ心理的効用性^{注6)}を欲求の弱い者ほど認めている傾向がその特長であろう。

態度Ⅰ, 態度Ⅱを中心にしてみる。態度Ⅰと技能の反応内容をみると(表1-3), スポーツを好む者ほど運動技能が優れ, 健康との関連をみると(表1-4), スポーツを好む者ほど体調がよく, さらに満足度との関連は(表1-5), スポーツを好む者ほど日常生活に対しては, やや高い満足感を得る傾向にあると言えよう(態度Ⅰと満足感の危険度は5%水準)。生活価値との関連をみると(表1-6), スポーツを好む者ほど仕事と遊びの両立型に指向する傾向がみられる。しかし健康との関連で, スポーツを嫌う者でも体調が良いとする者が多くおり(男子50.6%, 女子22.2%), また生活価値との関連でも非常に嫌いと答える層に仕事と遊びの両立型が多い(男子100.0%, 女子66.7%)ことは他の結果と比べると特異である。次に態度Ⅱをみると, 技能との関連では(表1-7), 運動技能の優れている者ほどスポーツの非効用性を認知し, 逆に劣っていると判断する者ほど気晴らしなどの心理的効用性, あるいは生理的効用性を認める傾向がみられる。健康との関連をみると(表1-8)体調がよい者ほど生理的効用性および心理的効用性を認知する傾向にある。生活価値との関連をみると(表1-9), 仕事第一主義の人にやや生理的効用性と非効用性を認知する傾向がみられるが, ほとんどその差はないとみてよい(男子5%の危険度, 女子は有意差なし)。また満足感との関連をみると(表1-10), 日常生活へ高い満足感を持つ人は, 生理的効用性を認知する者が最も多く(男子41.0%, 女子46.2%), 不満足層は心理的効用性を認知する者が最も多くみられる(39.2%, 35.9%)。

次に態度Ⅰと態度Ⅱの関連をみる(表1-11)。効用性指向と非効用性指向の二つの群に分けてみ

ると、効用性に指向する群に比べて、非効用性に指向する群に、好きでも嫌いでもない、嫌いとする回答が多い。男子、女子とも同様の傾向を示す。逆に非常に好きとする者が他に比べてかなり少ない(男子19.1%, 女子11.3%)。

客体的変数の1次変数と2次変数の関係をみる。まず、地域と施設の関連をみると(表1-12), どの群においても家の周辺, その他・非回答と答える者の割合がほぼ半分に達し最も多い。特に騒音でうるさいとする地域にはその他・非回答者が最も多くみられる(男子24.0%, 女子37.8%)。また公害があると答えた地域が他地域に比べ、男女とも家の周辺や空地での活動が多く、学校施設での活動が最も少ない。車の騒音でうるさいとする地域では、これと逆の傾向を示し、家の周辺が少なく学校施設での活動が多い(しかし女子は5%の危険度で有意差が認められるにすぎない)。地域と指導者の関連をみると(表1-13), 町中で静かな所, および自動車の往来の激しい所に住んでいる人に指導者がいると答える者が多い。地域と集団の関連を現在入っているという回答に限定してみると(表1-14), 男子は市街地で騒音に悩まされている地域が集団加入が最も多く(27.5%), これに対して女子は町中で静かな地域が集団への関わり方の割合が最も多い(21.1%)。しかし指導者, 集団のいずれの場合も危険度は1%, 5%レベルの有意差であり, 明らかな傾向であるとは言えない。

c. 活動と1次変数間にみられる反応内容

次にスポーツ活動に直接関連すると規定した1次変数についてその主な反応内容をみる(すべての変数が0.1%の危険度で有意な関連にあるので以後は具体的な反応内容を百分率に基づいて考察する)。まず主体的変数についてみる。活動と経験の関連をみると(表1-15), スポーツ活動を継続的に実施している者ほど学校時代の運動クラブの経験者が多い。しかし継続的实施者を細かくみると, 継続A型実施者は継続B型実施者よりもクラブの経験は少ない(男子が69.2%に対して76.1%, 女子が62.5%に対して68.2%)。また技能との関連をみると(表1-16), 継続的に活動している者ほど自己の運動技能を高く評価している。

次に態度Iとの関連についてみると(表1-17), 継続的实施者はどスポーツを好きとし, 態度IIとの関連をみると, 継続的实施者ほど生理的効用性を高く認知する傾向がみられる(表1-18)。しかしこれをやや詳しくみると, 非継続的实施者, 非実施者の場合も, 生理的効用性に指向する割合は最も高いが, 継続的实施者群と比べてより顕著な差は, 社会的効用性, 心理的効用性を認知する傾向が強くなる点にある。

さて, 健康との関連をみると(表1-19), 継続的に実施する者ほど体調が良いとする者が多く, 逆に非継続的实施者さらに非実施者となるほど体調が悪いとする者が多くなっている。

しかし女子の継続的实施者の場合は, 継続A型は継続B型に比べて体調が良いとする者が少なく(37.0%に比べて27.1%), 逆に悪いとする者が多くみられる(10.7%に比べて18.8%)。女子の継続的实施者を年代別にみると男子に比べて高齢層が多いが, このことが影響しているのかもしれない。活動と余暇時間, また, 所得との関連をみると(表1-20, 表1-21), 継続的实施者ほど, 余暇時間や所得がやや多い傾向を示している。しかし具体的な数値をみていく限りではその差はほとんど認められない。これらについては次節でやや詳しく扱う。

最後に, スポーツ活動の場を直接構成する集団, 指導者, 利用施設との関わり方をみる。まず, 活動と集団の関連をみる(表1-22)。男子では継続的实施者ほど何らかの集団に加入した経験が多い傾向を示す。これに比べて女子は男子のように顕著な差は認められず, 極端に加入経験者の少ない非実施者群を除いて3群がほぼ同じ割合を示している。また現在何らかの集団へ加入している者は, 非継続的实施者群よりも継続的实施者群の方に多い。さらに継続的实施者群を細かくみると, 継続A型実施者群よりも継続B型実施者群の方にその割合は高い。また, この結果は女子において特に顕著である。指導者との関連をみると(表1-23), 継続的实施者ほど指導者がいるとする者が多い傾向にある。しかし, この場合も先の集団と同じように, 継続A型よりも継続B型の方にその傾向は強くみられ, また男子よりも女子において顕

表 2 2 群分類, 3 群分類における主体的, 客体的変数の関連

		2 群 分 類				3 群 分 類							
		順位	変 数	Cr係数	χ^2	順位	変 数	Cr係数	χ^2	順位	変 数	Cr係数	χ^2
男 子	1	施 設	0.367	※※	6	経 験	0.232	※※	6	態 度Ⅱ	0.164	※※	
	2	集 団	0.324	※※	7	所 得	0.222	※※	7	技 能	0.155	※※	
	3	態 度Ⅱ	0.326	※※	8	技 能	0.205	※※	8	所 得	0.122	※※	
	4	態 度Ⅰ	0.260	※※	9	健 康	0.194	※※	9	健 康	0.120	※※	
	5	指 導 者	0.246	※※	10	余暇時間	0.133	※	10	余暇時間	0.083	なし	
女 子	1	施 設	0.450	※※	6	態 度Ⅰ	0.243	※※	1	集 団	0.362	※※	
	2	指 導 者	0.301	※※	7	技 能	0.236	※※	2	指 導 者	0.356	※※	
	3	態 度Ⅱ	0.300	※※	8	経 験	0.199	※※	3	施 設	0.281	※※	
	4	健 康	0.264	※※	9	余暇時間	0.161	※※	4	態 度Ⅰ	0.224	※※	
	5	集 団	0.256	※※	10	所 得	0.155	※※	5	態 度Ⅱ	0.207	※※	
		6	経 験	0.138	△	7	余暇時間	0.131	※※	8	技 能	0.125	※※
		9	健 康	0.124	※※	10	所 得	0.116	なし				

* $Cr = \frac{\chi^2}{n(t-1)}$ (n はサンプル総数, t は関連する 2 項目のうち選択肢の少ない項目の選択肢数)
 (※※ $p < 0.001$ ※ $p < 0.01$ △ $p < 0.05$)

著である。次に、施設との関連をみる(表1-24)。まず、男子、女子とも非実施者群に非回答者・その他回答者が多い(男子54.5%, 女子58.6%)。先に述べたように、これらの回答の大部分は活動していないから施設については答えられないという意味であろう。次に非継続的实施者ほど、主に家の周辺で実施し、逆に継続的实施者ほど職場や学校、公共の施設を多く利用する傾向がみられる。継続A型と継続B型を比較すると、継続A型実施者が男子では職場の施設を主に利用し、女子では家の周辺を主に利用する傾向が認められる。

2. 2 群分類, 3 群分類における主体的, 客体的変数の関連

ここでは仮説②で述べたように、スポーツの実施頻度により調査対象者を2群分類, 3群分類し、各々の分類での活動実施に関与する主体的, 客体的変数について検討する。結果を表2に示す。まず、2群分類(非実施者群, 非継続的实施者群)からみる。男子では活動する施設(Cr係数は0.367, 以下同様), 集団(0.324)などスポーツ活動が具体的に展開される場を直接構成する客体的変数の関連度が高く、しかも0.1%の危険度で有意な関連が認められる。(以後、特別に断わらない場合の危険度はすべて0.1%で有意な関連

にあるものである。以下、Cr関連係数を主にみ、関連度が高い、低いという具合に表現する。)次いで態度Ⅱ(0.320), 態度Ⅰ(0.260)などの主体的変数の関連度が高い。これらに比べると、指導者(0.246), 学校時代のクラブの経験(0.232), 所得(0.222), 運動技能(0.205), 健康(0.194)などの関連度はやや低い。特に余暇時間は男子で10番目(0.133), 女子で9番目(0.161)と低い順位となっている。しかも男子では他の変数に比べて、これだけが1%水準の危険度である。このような2群分類の考え方からみると、時間的要因というのは現在においては、スポーツの実施, 非実施を考えるに際して、それほど強い意味を持たなくなってきたと言えるのではないか。女子については男子と類似した傾向がみられる半面、かなり異なる結果も認められる。まず施設(0.450)の関連度が男子と同様に最も高いが、男子と異なり、集団(0.256)よりも指導者(0.301)の関連度が高く、さらにこれら客体的変数に次いで主体的変数の中で態度Ⅱ(0.300)とともに健康(0.264)の関連度が高いことなどが女子の特長としてあげられよう。以上の結果から男子と女子の差は認められながらも、両者を通して、まず施設, 集団, 指導者など客体的変数の関連度が高いこと、次いで

主体的変数の中でも態度Ⅱ、態度Ⅰなどの心理的要因の関連度が高く、特に男女とも態度Ⅰに比べて態度Ⅱの関連度が高いことなどが2群分類における主な傾向として捉えられよう。

次に3群分類における結果についてみると、男子では学校時代のクラブ経験(0.341)が最も高い関連度を示している。継続的实施者にクラブの経験者が多かったことに関係してくるのであろう。これは嘉戸⁴⁾にみられる社会人のスポーツ活動とクラブ経験の調査と同じ結果を示したことになるが、この関係は3群分類の段階で強く認められるものであること、また継続A型(男子69.2%, 女子62.5%)よりも継続B型(男子76.1%, 女子68.2%)にクラブの経験者が多いことなどが新しく解明された点である。次いで態度Ⅰ(0.215)が高い関連度を示す。3群分類になると、男子では、経験、態度など主体的変数の中でも特に変容しにくいものが高い関連度を示すのがこの段階の特長と言える。集団(0.210)、施設(0.206)、指導者(0.186)等は、同じ程度の関連度とみてよい。その他の変数の順位をみると、ほぼ2群分類のときと同様の結果を示している。一方女子は、男子と異なり、2群分類でみられた傾向を更に強め、集団(0.362)、指導者(0.356)、施設(0.281)などの客体的変数の関連度は更に高くなる傾向がみられる。次いで態度Ⅰ(0.224)、態度Ⅱ(0.207)の関連度が高い。以上の変数と比べて、他の変数の関連度は全般に低く、健康(0.124)が順位を低くしたのを除いて、2群分類とほぼ同様の結果を示している。特に余暇時間は5%水準の危険度であり、また所得については有意差は認められないことも女子の3群分類における一つの特徴と言える。

2群分類と3群分類を全体を通して比べると、3群分類においては2群分類では余りみられなかった男子と女子の差がもっと強く現われるようになったことである。すなわち男子は主体的変数、女子は客体的変数の関連度の順位が高くなる傾向がある。換言すると男子は主体的条件、女子は客体的条件によって影響されやすいということであろう。また2群分類以上に、3群分類では、所得や余暇時間の関連度が低くなることも一つの

特徴である。態度に限ってみると、男女とも2群分類では態度Ⅱが態度Ⅰよりも関連度が高いのに比べて、3群分類ではそれが逆になる。また客体的変数に限ってみると、2群分類においては利用施設が高い関連度を示したのに比べて、3群分類では指導者、集団の関連度が高くなる。これらは男女ともにみられる特徴と言える。

結 語

以上、二つの作業仮説に従いながら、クロス集計を主に得られた結果を検討してきた。ここではそれらに基づく若干の論議と要約を行い、本研究の結語とする。

モデルを構成する変数ごとに χ^2 検定を行ない、二つの変数間の関連性を明らかにした。1次変数についてはすべて0.1%の危険度で有意な関連が認められたが、2次変数の多くは1%, 5%の危険度の関連であった。しかしこれだけでモデルを構成する際に区分した1次変数、2次変数の区別の妥当性が実証されたのかということそうではあるまい。一つの理由は、1次変数に比べて2次変数として掲げた変数の内容が「地域」にしろ「生活価値」にしろ極めて曖昧な規定(具体的には質問紙のワーディング)を行なっている点である。1次変数に比べて真に有意な関連にないのか、それともワーディングの不備が影響しているのか。これらからして1次変数、2次変数と区別して作成したモデルの意味は、ここに設定した限りでは意味があると言えても、しかしそれらはあくまでこのモデルの枠内に限定しての結論ということになる。このモデルが具体的な人々のスポーツ行動のメカニズムをより明らかにしているか否かの論議はこの限りでは言えないということになる。これを明らかにするには、他の変数群からなる別モデルとの比較対照、また因果分析手法が必要になってこよう。今後の課題である。

反応内容の考察については、ほとんどが結果の提示、それとかなりグロスな報告に終わってしまった。これらをみると、これまで経験的に認められ、また主張されてきたスポーツ活動とその効用、スポーツ活動とそれを可能にする条件の関係を追認する結果になっている。しかしその中でも

態度Ⅱと技能の関係(技能の優れている者ほど非効用的スポーツ態度をとり, 逆に劣っている者ほど心理的・生理的効用性に指向するスポーツ態度をとる傾向), 活動と利用施設の関係(非継続的实施者ほど家の周辺で活動し, 継続的实施者ほど職場や学校, 公共の施設で活動する傾向)等, スポーツ指導のあり方, スポーツ環境の整備等を考えるに際して, 何らかの目処になると思われる結果も見いだされた。より詳しい分析が必要になろう。ともかく, スポーツ行動の研究はそれが種々の要因から成立し, また多くの効用をアウト・プットしていると仮定されるだけに, 広くその全貌を捉えようとするとは総花的, 平板的になり, また逆に詳しく分析を試みると実践の指針としては余り有効でないいわば実験室でのデータになるというトレード・オフの関係になりやすい。この問題について当面とるべき方法は, まず広く捉えていくつかの問題点を摘出し, それからそこを集中的に分析していくという段階的な方法が適当のように思われる。

②の仮説については, スポーツ行動に関する研究の中で, 活動成立要因に関する領域に属するもので, これまでも触れてきたように, いくつかの先行研究が見いだせる。それぞれの研究は独自の仮説と方法で行なわれており, それぞれ結論は異なり(例えば, 金や暇の要因が強いか弱いかをとっていても異なる見解が示されており, 一応の了解もできていない), それなりに長所と短所を備えていると言わざるを得ない。しかし今後は, 精度が高く, しかも汎用性のある質問紙の開発と並行しながら個々の研究を照合, 比較, 統一していく試みが必要になってこよう。

以上, この種の研究の基本的性格に関わる問題はあるが, 以下では, ここで設けた仮説に絞って考察する。活動成立要因を主体-客体条件のダイアディックな関係のもとに考察した先行研究はほとんど見られない。わずかに調枝⁹⁾が動機づけとの関連で社会人には客体条件→主体条件の順序の動機づけがよいと一種の仮説を提示しているにすぎない。これについて本研究では, 2群分類においては, 男女とも客体的変数の関連度の順位が高いことが明らかになった。ところでここで用いた

2群分類, また3群分類があくまで静態的な分類であることは確かであるが, 一方で, 活動頻度の高いものほど経験者の多いという結果(表1-15参照)もほぼ認められている。したがって本研究の2群分類の分析をもって, 活動が生起する段階, すなわち未経験者が活動し始めるレベルでは客体的条件に影響されやすいという結論をひき出しても妥当性は一応あるものと判断してよいのではないか。しかしこの関係も, 3群分類, すなわち活動が持続し発展する段階では男女差が明らかになり, 男子では主体的条件が女子では先の段階と同じく, 客体的条件が強く関連することが明らかになった。

さてこの一般的な傾向は, 更に細かく検討することで, 種々の実践的問題を解明する可能性につながるものと思われる。以下に要約して本研究の総括に替えたい。

(1) 金, 暇等, 従来, スポーツ活動実施を妨げる要因として重視されてきたものは, 現在ではその関連度は意外に高くなく, 施設やグループ等, 比較的条件の整備いかんでは変更が可能になるものが関連度が高くなったこと。これらのことから施設や指導者等のスポーツ環境の整備, また受益者負担等の問題についても新しい角度からの検討が要請されよう。

(2) 主体的条件については, 健康や技能よりもスポーツに対する態度の関連度の順位が高かったこと, また2群分類, 3群分類で, 態度Ⅰと態度Ⅱの順位が入れ替わること。これらのことからスポーツ指導の内容, 指導方法, リーダーシップのあり方等について大胆な組み替えが必要になってこよう。

(3) 男子は主体的条件, 女子は客体的条件の関連度が高いことは, これを事業の推進者, 指導者の側からみると, 女子の方が制御しやすい状態にあるということになる。いわゆる社会体育の現実態をみても, その大部分はママさんバレー等に代表される婦人層が担っている⁹⁾が, これらもこの結果と照合すれば必然性を帯びていたものと言えよう。今後はこの種の考え方や分析手法を更に精緻化し, 制御しやすい階層, しにくい階層と対象者を分別し, それぞれに応じてその疎外, 促進要因

をコントロールしていく……。すなわち限りある社会的資財、また施策のエネルギーを現状にみられる地域一括主義、ぐるみ主義とは異なる方法で、効率的に配分、集中させていくシステムが考えられる必要がある。

(本稿は日本体育学会27回大会にその一部を発表した)

参 考 文 献

- 1) 青井和夫, 松原治郎, 副田義也編 ; 生活構造の理論, 有斐閣, 1971.
- 2) 荒井貞光, 小村 晃, 杉山允宏, 松本純子, 松田泰定 ; スポーツ行動に関する実証的研究(1), 広島大学総合科学部紀要Ⅱ, 1, 33~51, 1975.
- 3) 荒井貞光他 ; 地理的, 社会的条件を考慮した体力づくり計画の最適化に関する研究, 71, 総理府青少年対策本部体力づくり指導資料, 1976.
- 4) 嘉戸脩他 ; No. Ⅰ. 社会体育の動機に関する調査, 第一報, 昭和47年度日本体育協会スポーツ科学研究報告, 80—81.
- 5) 金崎良三, 橋本公雄 ; 学生の課外体育活動に関する研究 (第1報), 九州大学体育学研究, 5—4, 27—35, 1976.
- 6) 鴨脚 清 ; 人間環境と集団, 96—97, 福村出版, 1973.
- 7) Kyuzo TAKENOSHITA, Social Factors Affecting Sports Participation. 体育学研究, 7—4 (海外版第2号), 10—20, 1964.
- 8) 高木 修 ; 社会的行動に及ぼす態度の効果, 関西大学社会学部紀要, 創立九十周年記念特輯, 250—251, 1975.
- 9) 調枝孝治他 ; No. Ⅱ, 社会体育の動機に関する調査, 第二報, 昭和48年度日本体育協会スポーツ科学研究報告, 29—33.
- 10) 戸川行男 ; 適応と欲求, 57, 有斐閣, 1956.
- 11) 12) 富永健一 ; 社会学理論と「モデル」の役割, 思想, 692, 1963—5.
- 13) 中島豊雄 ; 学校体育と社会体育の接点に関する研究, 名古屋大学教養部紀要, 第15号, 61—85, 1971.
- 14) 中島豊雄 ; 前出, 65.
- 15) 中島豊雄 ; 前出.
- 16) 永吉宏英, 江橋慎四郎, 桑野 豊, 島崎 仁 ; スポー

ツ活動成立要因に関する研究, ——林の数量化理論第Ⅱ類を用いて——日本体育学会第25回大会号, 187.

- 17) 西垣完彦 ; 現代体育教師の生活と意識, 体育社会学研究 5, 道和書院, 1976.
- 18) 安田三郎 ; 社会調査ハンドブック (新版), 20, 有斐閣, 1969.
- 19) 山本清洋, 森脇光世 ; 企業レクリエーションに関する考察, 岡山県立短期大学研究紀要第19号, 57—68, 1975.
- 20) 山本清洋 ; 前出.

脚 注

注1) この研究を略述すれば, (例えばスポーツに対する態度をみると) 男子は生理的, 社会的効用性, 女子は心理的効用性に指向する傾向があり, 若年層は非効用的スポーツ態度, 高年層は効用的スポーツ態度をとる者が多い. 男女とも 50, 60代は生理的効用性に指向し, 30, 40代は社会的効用性に指向する傾向が強い等, スポーツ行動に関して21の傾向を指摘した.

注2) 一つ一つの変数をどのような質問で明らかにしたのか, またその妥当性などが明らかにされねばならない. 本研究はその過程は省略し, 文中にも述べたように先行研究, 調査の中で比較的多く採用されてきた質問例を引用したにとどまった. その限りでは極めて不備な社会調査といわれても仕方がない. 特に施設の規定等については最も疑義が残る. ワーディングの検定を含めて今後の課題とする.

注3), 注4), 注5), 注6) スポーツに対する態度を説明するのに著者らは次のような操作概念を仮定した. まず, スポーツを行なうことにより, 何らかの効用を獲得しようという態度を効用的 (認知的) スポーツ態度と定義した. 次に, この態度と対応させる意味で, スポーツを行なうことそれ自体を優先させ, 効用を得ようという目的意識は二次的とする態度を非効用的 (感情的) スポーツ態度と定義した. さらに, 効用的スポーツ態度は, 生理的効用性 (健康や体力の維持・増進等), 心理的効用性 (気分転換等), 社会的効用性 (仲間づくりや人間関係等) の三つの成分から構成されると仮定した. これらの定義の妥当性の検定等については行っていない. 今後の課題である.